
それよりなにより、

色

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

それよりなにより、

【コード】

N48010

【作者名】

色

【あらすじ】

っていつか、なんであんたがモテてるの。

吐き気がした。それはわたしの奥の奥から静かにゆっくりと沸き上がって、もうすぐ喉に届きそう。

生暖かくてぐるぐる回ってもやもやしてて、呆れながらも苛々するような、なにもかも取り込んでぐちゃぐちゃに掻き回したいような、そんな行き場のない気持ちかわたしを内側から蝕む。例えば殺虫剤のように、一気にこの気持ち悪さを簡単に掃除してしまえるものがあつたなら。わたしは喜んで飛び付くのに。現実にあるソレは、きつとわたしには巡って来ない。

「……………あ、あのう……………」

「ナンデスカ」

「高岡沙由ちゃん、だ、よね」
たかおかさゆ

「そうです」

「ちよつと来てくれないかな」

行きたくない、と言えばそれで終わっていたのかもしれないのだけれど。そうすれば余計にややこしさが増すのは目に見えていた。

ちらりと目を向ける。いわゆるオジヨウサマ、が三人。昼休み真っ只中の三階廊下、突き当たり。後ろにはくすんだ壁が立ち塞がり、わたしを圧迫する。同じように呼び出しをくらうのなら、風通しの良い裏庭の方がよっぽどいい。壁に囲まれる廊下の突きあたりは、窓から吹き込む風が重苦しく溜まり、それに絡まるようにいろんな音や匂いや、埃なんかも連れて、わたしはそんなごちゃごちゃに溺れそうになる。

昼休み独特のざわざわが響いて耳に当たる。教室から染み出てスーッと流れた誰かの焼きそばパンの匂いが鼻について、更に嫌気が

増した。

「あのね、沙由ちゃん」

「なに」

右側の一人が口を開く。薄いピンクのルーージュが、油っぽく見え

た。言いたいことは分かってる、というか、わからないはずがなかった。もしこの場にもう一人全くの他人がいたとして、「何？ どうしたの？」なんて聞こうものなら、わたしのこの気持ち悪さを全てぶちまけてやりたいと思う。

「竹中^{たけなか}くんと付き合ってるの？」

「どうしてそんなこと聞くの」

「都^{みやこ}はずつと前から竹中くんのことが好きだったの」

その子は、そうなのよね、と隣の女の子の方を向いて優しく同意を求めてから、もう一度じろりとわたしを見た。

くだらない。

今まで黙りこくっていた、主役である真ん中の髪の毛の長い女の子は、遠慮がちにコクンと頷いただけだったけれど、そういう奴に限って自己中で図々しい性格なんだってことを、わたしは知っている。

「へーそうなんだ。ふうん」

わたしがへらつと口だけで笑うと、彼女たちは露骨に面白くなさそうな顔をした。

わたしと竹中が付き合っていないなんてことは、みんな知っている。私たちはそんな関係ではないし、わたしがいくらそう願っても、そ

うはならないことは明らかだ。彼女たちがそんなことを聞きたいわけではないことは、承知の上での会話だった。解りやすく乙女の嫉妬を説明してもらわなかったって、そんなことは分かりきっているから、回りくどい言い方は止めて欲しいと思った。時間の無駄だ。恥ずかしがり屋で根性無しで弱いから。そしてちよっぴり楽しいから。

小さな計算。それから、それとなくゴウインな約束。単純過ぎる展開に、思わず笑った。

「付き合っていないんだったら、もうこれ以上竹中くんに近付かないで」

笑えない。くだらない。つまらない。

女ってどうしてこんなに面倒臭いんだろう。

「イ、ヤ」

「なんでー！俺は絶対いいと思うんだよね！」

「……そこからのいじめネタでしょ。あたしそんなヤラレ役ヤダ」

長く綺麗な指と指でシャーペンをくるくると回す竹中は、「でも負けない主人公、かっこいいじゃん」と、口を尖らせた。

相変わらず昼休みの教室はざわざわと揺れていた。白いカーテンが、夏の終わりを告げるにはまだ早い、生温い風を目一杯吸い込ん

で膨れた。昨日の夜から今日の朝にかけて雨が降っていたから、まだ少し湿っぽい。

「なんか暗いよ。だって文化祭だよ、ウケないって」

でもなあ、と粘る竹中を横目に焼きそばパンをかじる。ソースの香ばしい匂いが、開けっ放しの窓からふよふよと駆け出してどんどん昇って、平凡の塊であるあたしと竹中を見下ろして笑った。無表情の雲が薄く均一に張られた空はどこを見てもずーっと白で、やっぱり退屈だった。

「あ、」

「何」

「そっぴやさ、さっきあの子見かけたよ。ほら、誰だっけ、あんたが最近よく相手してる子」

「ん、ああ、高岡？」

一旦止まった緑色のシャーペンは、間を置いてまた回った。

「また呼び出されてたよ、今度は都に」

「へえ」

「へえってあんた、かばいに行かなくていいの？」

彼女候補なんですよ、とあたしは笑った。

シャーペンのくるくるは静かに止まって、代わりに大きなあくびが顔を出す。潤んだ瞳であたしを眺めて、竹中もちよっと笑った。

「で、あいつをかばいに行つて、俺は何て言うのさ」

「俺の彼女に手え出すなーって怒鳴り散らすの」

「彼女じゃないし、少女漫画かつっの」

今時腐ったヒーローでもそんなことしないよ、と笑った竹中の顔が綺麗で、モテる理由が少しだけ分かった気がした。

湿気を含んだ風があたしたちの髪を撫でる。昼休みの残り時間を気にしながら、焼きそばパンを頬張った。机に俯せる竹中の手からシャーペンが零れて机に当たるカツンという音と、間抜けなあくびがふわりと香った。

終。

(後書き)

結局は他人事、がテーマです。ちょっとベタな女子高生ごたごたネタって初めて。個人的にはベタ展開も好きなんですけどね！
そしてやってみたかったのが場面の切り替え。楽しかったです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4801o/>

それよりなにより、

2010年10月24日03時27分発行